NPO 法人日本デザイン協会 H26 年度事業報告　トークイベント**「ウイリアム・モリスと現代」**抄録

共　催　:NPO 法人日本デザイン協会（JDA）・日本建築家協会（JIA）デザイン部会
開催日　:平成 26 年 9 月 19 日（金）　18:30～
場　所　:（公社）日本建築家協会 JIA 会館 1 階　建築家クラブ・渋谷区神宮前 2-3-18

対談者：川端康雄　日本女子大教授×大倉冨美雄　NPO 日本デザイン協会理事長
総司会：山本想太郎　日本建築家協会デザイン部会長
　　NPO 側：木村戦太郎　日本デザイン協会理事

『今の日本に教えるものがある』

１９世紀のイギリスのデザイナーとして知られているウィリアム・モリスは、デザイン系の美術大学などでは、産業革命と前後して活躍した「デザイナーのはしり」として必ず出てくる人物です。

ところが、その業績を見ていくと、とても一介のデザイナーなどでは収まらない姿が見えてきます。それは詩人であり、物語作家であり、今でいうグラフィック・デザイナーであり、テキスタイル・デザイナーであり、その技術士であり、それらを活かして会社運営を軌道に乗せています。それどころか、環境問題に言及し、社会主義運動をした活動家でもあったのです。

ここで重要なのはモリスが、「労働」を楽しむべきものとして扱い、その後の社会主義運動に影響を与えたことです。エンゲルスの「空想から科学へ」という著書をご存じかと思いますが、この「空想」は遡ってモリスの著書「ユートピアだより」のユートピアからきているのですが、それを日本語訳として「空想」としてしまったのです。エンゲルスは「もっと科学的に」とモリスの考えを批判して、マルクスと共に改革の主導者になったのですが、その後、社会主義も共産主義も破綻に瀕しています。

ここで改めて、現代の視点で見るとモリスの労働の概念が、深い意味を持っていることが感じられるようになったのです。その「楽しむべき労働」とは、手仕事や、現代でいう知的創造行為などで感じられる、「それをやっていることが幸せ」であるような労働の感覚を言っているようで、究極にたどり着くのが芸術家の無垢な創造意欲のような状態を想定できるのです。そのような理解によって、モリスの言う、「社会の変革なくしては芸術の再生は不可能だ」という思いが想像できますし、また創造活動と政治活動を繋げることもできるのです。そしてその精神は「デザイン」に通じるものであるのです。

改めて今の日本の社会を見ていると、このような大きく、根本的な社会問題を認識させてくれるウィリアム・モリスの存在意味を感じさせてくれた一夜で、５０人になる参加者で盛り上りました。

このトーク全体概要は添付の PDF ファイルからご覧になれます。

この企画は NPO 日本デザイン協会と日本建築家協会の共催で開催されました。